

研究ノート(5)

ジャン・ルーカ・ポテスタの論文 「中世後期の急進的黙示的運動」(後半)について

足 達 賀代子

はじめに

黙示思想の歴史を通覧し、その概要を理解することを目的として研究ノート(5)を作成する。本稿は、近畿大学文芸学部論集『文学・芸術・文化』第31巻第2号(2019年9月)掲載の研究ノート(4)で扱ったジャン・ルーカ・ポテスタの論文「中世後期の急進的黙示的運動」の前半部分に引き続き、同論文の後半部分について論旨を要約し、必要に応じて解説を加えるものである。前稿でも触れたが、同論文は *The Continuum History of Apocalypticism* (Abridged Edition by Bernard McGinn, John J. Collins, and Stephen Stein. New York: Continuum, 2003) の第12章に所収されており、英文原題は“Radical Apocalyptic Movements in the Late Middle Ages”である。筆者ジャン・ルーカ・ポテスタ (Gian Luca Potestà) はミラノ、カトリック・サクロクオーレ大学教授として教会史を担当しており、1980年にマリピエロ賞 (Award Malipiero、フランシスカン・スタディーズ) を受賞した『カッサーレのウベルティーノの歴史と終末論 (*Storia ed escatologia in Ubertino da Casale*)』(Milano: Vita e Pensiero) の他、多数の著書、論文がある。その他ポテスタについては前稿冒頭に簡単な略歴を付しているのので、そちらを参照願いたい。

中世後期には様々な終末論的運動が見られ、終末を説く思想家や運動家が多数現れた。ポテスタはそれら運動や思想家のうち、終末は切迫しており、世界に劇的変化をもたらすという信念に基づいて行動した急進的黙示的思想家、運動家たちに考察対象を限定し、彼らの終末観とそれに基づいた思考や行動を理解することを論考の目的としている。従来、中世後期に現れた急進的黙示的運動の考察は、社会構造との関係性に焦点が絞られることが多く、それらの運動がいかに近、現代の社会改革や革命思想の先駆けとなったのかが議論の中心になることが多かった。だが、中

世後期の急進的黙示的運動は、必ずしも今日的意味の革命や社会構造の転覆を意図していたわけではない。その多くは、宗教的敬虔を守るなかで教会の世俗的腐敗への疑念と批判を抱き、次第に教会の浄化と改革への希望へと高まり、ついには政治的的局面を伴った社会変革の要求へと推移していったのである。このことを踏まえてポテスタは、中世後期の個々の急進的黙示的運動の概念的背景の再構築を試み、それぞれの運動の信条や教説、それに基づく行動がどのように始まり、引継がれ、変化していったのかを考察し、それぞれの運動の実態的な姿を可能な限り再構成しようと試みている。前稿で扱った論文前半でのポテスタの考察対象は、使徒兄弟団、ベガン、フランシスコ会聖霊派、フラティチェッリの各宗教運動であった。後半では、ロラード派、ルペシッサのヨハネス、ブラウンシュバイクのフレデリック、フス派、ターボル派、ヴィルスベルク兄弟団、サヴォナローラとその支持者たちが考察対象となっている。以下、ポテスタの論旨をなるべく忠実にたどりながら、ノート作成者(以下、「作成者」)による全訳(試訳)に基づき、重要部分の要約を行いながら適宜注釈を加えていく。作成者が加えた解説や補足説明部分には括弧内注記を付し、要約部分と解説部分の区別の明確化に努めるが、読者の煩雑を避けるため適宜簡略化する。また、ポテスタによる膨大かつ詳細な注及び文献リストについては残念ながら割愛する。

ジャン・ルーカ・ポテスタ「中世後期の急進的黙示的運動」(後半)

ロラード派 (pp.308 - 309)

14世紀から15世紀にかけて異端審問はフランス、イタリアにおける黙示的運動の抑圧に成功した。だが、異端審問の方法が時代に合っていなかったり、俗界司直の協力が完全には得られていない地域では状況は異なっていた。そうした地域では、14世紀末以降急進的運動が広まり、運動に参加した者たちは自らの信条を公言したり、多数の平信徒を運動へと転向させた。教会側による抑圧に対する彼らの攻撃は、当時の権力構造と社会形態に対する批判をますます伴うようになった。

14世紀後半、イングランドでは、オックスフォード大学教師のウィクリフ(1384年没)が教会の位階制に対する厳しい批判を表明した。ウィクリフは、可視

的教会の位階制と教会法の腐敗を指弾し、聖書に基づく、選ばれし者たちのための不可視の教会と対置した。ウィクリフは、可視的教会は反キリストの座であると述べ、著作や説教でしばしば反キリストの概念を用いたが、彼の解釈は黙示的というよりも政治的であった。ウィクリフの場合、「反キリスト」という用語はローマ教皇庁と教皇を指しており、両者は神の主たる敵、つまり「最大の反キリスト (maximus antichristus)」と「公然たる反キリスト (patulus antichristus)」であるとされた。ウィクリフにとって反キリストと教皇は同意語であった。この場合、教皇は特定の人物ではなく教会制度を指すのに最も適した表現であった。ウィクリフ自身はいかなる黙示的、千年王国的な暗示をも明確に否定しているのだが、上のような極端な用語は彼の言説に急進的で深刻な調子を与えたため、著者自身の考えとは異なった解釈を惹起することとなった。

ウィクリフは、教会大分裂（1378年）の最初の混沌たる局面において、彼と手を組めそうだと考えていた改革者らから距離を置いていた。教会組織が彼とその追隨者らを「ロラード派」と呼び、彼らに対抗したのはその頃であった。ロラード派の説教が1381年の「農民反乱」（訳注 ワット・タイラーの乱）に何らかの責任があったという嫌疑がかけられると、社会的・政治的権力構造に対する彼らの憎悪に火がついた。実際、ウィクリフのメッセージは学者、低位聖職者、平信徒、手工業労働者や職人、騎士らに受け入れられた。知識人らが彼のメッセージの普及に主要な役割を果たした結果、彼のメッセージは教育を受けていない人々にも広まったのである。

確実にオックスフォードで学んだと思われる学識ある支持者が、1389年のクリスマスから1390年のイースターの間、『至高の書 (*Opus arduum*)』を著した。この書は『黙示録』のラテン語による注釈書であるが、農民反乱の支持者、参加者として迫害を受けていたロラード派の擁護を主たる目的とした論考であった。著者は教皇による「福音的な人々」の迫害に関連させながら『黙示録』を解釈している。著者はこの書を獄中で著したが、身分を明かさなかった。『至高の書』はウィクリフに倣って同時代の教皇たちを、あるいは教皇制全体をと言ったほうがもっと良いが、反キリストと同一視した。だが、ウィクリフと異なり、著者は反キリストが歴史の中に具現化することを『黙示録』の黙示的な物語に照らして示している。

時に暗号のような曖昧な言葉を用いながら、『至高の書』の著者はウイクリフの異端宣告やロラード派の迫害といった最近の出来事を神の神秘の計画的一幕であると解している。彼はまた「福音書の説教者たち」に対し、屈服することなく、彼らの教えと説教と福音の研究を継続するよう奨励した。

黙示の信者や支持者たちは黙示的特徴が明確であったり、反キリストを仄めかしたりする福音書の箇所には強い関心を抱いていた。特に『マタイによる福音書』24章についての世俗語での注釈はイングランドのロラード派の間で流布していた(この注釈の17の写本が残存している)。幾つかの写本ではこの注釈書は『教会における聖務について』と呼ばれている。ウイクリフの慎重な配慮に従い、著者は最後の審判の日に関する詳細な計算を一切避けている。著者は、『マタイによる福音書』24章の記述に鑑みて、教皇を反キリストと、反キリストの手下達を枢機卿及び新しい修道会と、偽預言者らを托鉢修道士たちと同一視できると考えた。この書は特に教皇制と托鉢修道会に対する強力な反論である。

1413年、1414年に生じた事件、特にサー・ジョン・オールドカースル(ロラード派の指導者。1417年没)の逮捕と、その後に起こったロラード派が直接関与した反乱は、イングランド政府とロラード派運動の最終的な断絶を決定づけた。その後、ロラード派は地下に潜ることを余儀なくされた。教会側による抑圧が断続的であったことや、小さな共同体や家庭内にロラード派が身を潜めたことにより、同派は宗教改革の時期まで生き延びた。彼らの知的努力と神学的意識は徐々に弱まったが、黙示思想は彼らの最も強烈な靈感の源の一つとして散発的に表面に姿を現した。最も適切な例は1490年から91年にかけてニューベリーで発見されたある集団である。その集団は、この先10年間のうちにキリスト教徒は一人の羊飼に導かれる一つの群となり、あらゆる異端者もロラード派信者も自由に説教できるようになることを望む者や、ロラード派の信仰だけが世界を壊滅から救うことができると信じる者、また、終末の前にロラード派と聖職者らとの間に悲惨な争いがあるだろうと恐れる者などから構成されていた。

大陸における黙示的文書の広まり (pp. 309 – 311)

15世紀前半、ボヘミアでは、ウイクリフの教説がイングランドから直接取り入

れられ、かなりの重要性を持つようになった。ローマ教会への疑念がボヘミアで増大したことが特にその理由である。ボヘミアにおける黙示的、千年王国的傾向の高まりはヨーロッパ諸国から流入したテキストを徐々に吸収したことによる。そうした傾向の伝播は主として口伝えによるものであったに違いないが、写本の分布状況の分析により黙示的学説がどのように普及したのかが説明できるだろう。上述の『至高の書』の残存写本はすべて大陸で作られた。最古のものは1415年にさかのぼる。このテキストを端緒としてこのロラード派の著者による注釈書（『至高の書』）がイングランドからボヘミアに達した道のりを再構成することは可能である。『至高の書』はフィオーレのヨアキムやオリーヴィ、14世紀の黙示思想家ルベシッサのヨハネス（1366年頃没）に言及している。同書の匿名の著者はヨアキムからは距離を置いており、また、オリーヴィの『講義集』とルベシッサのヨハネスの幾つかの著作はロラード派への迫害の結果オックスフォードとソールズベリーから撤去されてしまったと述べている。実際、これら3名の著者の著作が1350年頃から1500年にかけてどの程度イングランドで知られていたのかを結論づけることは難しい。また、『至高の書』の著者がどの程度彼らの学説を知悉していたのかも明らかではない。

大陸における急進的黙示的運動の役割を理解するためには、ルベシッサのヨハネスについて考察することが助けとなるだろう。このフランスの托鉢修道士は人生の殆どを獄中で過ごしたが、彼はそこで幻視的、預言的な内容の幾つかの著作を著した。『患難の中での手引書（*Vademecum in tribulatione*）』（1356年）は彼の黙示観の概要を示している。この書ではヨハネスは切迫する患難を描き、読者に反キリストの到来に備えるよう熱心に説いている。その結果、修道士はキリストと使徒たちの生き方を取り戻すよう強いられることとなる。同書で彼は次のように説く。

世界は富の誇示や聖職者の世俗的な高ぶりのはかない栄光に対する憤りで満ちるであろう。平信徒と抑圧された民は予期せぬ思いがけないやり方で反乱を起こし、聖職者が束の間所有しているにすぎない財産を彼らから取上げるであろう。¹

また、次のような記述も見られる。その時には「民の正義」が貴族と暴君を貪り食うだろう、そして多くの力ある王たちは権威と富を失うであろう。その後、二人の

反キリスト（東の反キリストと西の反キリスト）が到来するだろう。艱難は伝統に基づき3年半の間続くだろう。反キリストの後には「軌道修正者」としてキリストによって送られる一人の教皇が来るだろう。彼は神秘のエリヤとなるだろう。改革活動を行うこの教皇は一人のフランス王によって支えられ、そのフランス王は皇帝となるだろう。これら二人の君主は安息の千年王国を開始させるだろう。その始まりの時には殉教者は復活し、ユダヤ教徒は改宗するだろう。ついに、最後の反キリスト（ultimus antichristus）がエリヤその人とともに到来するだろう。審判が最後に行なわれるだろう。²また、ヨハネスによれば、東の反キリストは1365年までに、一方、西の反キリスト（異端者の皇帝）は1370年より以前に到来すると予想されていた。これらの年はヴィラノーヴァのアルノルドによる計算に由来していた。アルノルドの『ダニエル書』12章の解釈はヨハネスによって忠実に再現された。また、ヨハネスは、王の暴力的な行為ではなく平信徒による反乱が教会の迅速な清めをもたらすと主張した。初めて教会の転覆が社会的変革と関連付けられ、貴族や富裕層と対立する「民の正義」への信念と結び付いたのである。

『患難の中での手引書』のラテン語の原典は大陸でかなり普及した。要約版はラテン語、フランス語、ドイツ語、チェコ語、カタロニア語、カステイーリャ語で出版された。ルベシッサのヨハネスによる他の著作はそれ程成功しなかった。だが、コゼンツァのテレスフォラスという偽名でのみ知られている匿名著者によって書かれた『小冊子』によってヨハネスの黙示思想が広まった。『小冊子』では、ルベシッサのヨハネスの黙示的期待は教会改革への要求の一面として理解されている。ルベシッサのヨハネスの幻視による教えは教会改革への欲求の高まりと結びついていたと結論することができるだろう。特にボヘミアにおいて、彼のメッセージは黙示的、千年王国主義理論の形成に寄与した。

ボヘミアにおける改革者、黙示思想家、千年王国主義者 (pp. 311 – 314)

ボヘミアの改革運動は、14世紀以来、ヤノフのマチエイのように反キリストの到来の切迫を強調したり、クロミエジーシュのヤン・ミリーチのように反キリストの攻撃に対して自らを守るのに必要な行動を中心に説いた説教師らの活動から生じる。プラハ大学の教師たちの関与があったことや、ウィクリフの著作やヤン・フス

の説教が流布したおかげで、1410年代、激しい民族主義的対立（チェック人対ドイツ人）を土台としてローマ教会を批判する新しい運動が誕生した。改革者たちは聖体の意味とその与り方を含む問題について論争していたが、それは国内的議論としても反ローマ教会プロバガンダの形としても最重要テーマの一つであった。これらの論争は教会内部において平信徒がいかに重要な存在になってきたかを示すものである。フス派は平信徒が両方の形式で聖体を拝領すること、すなわちカリスから飲み、聖別されたパンを食べることが許されるべきであると主張した。これは、ウトラキズム（二種陪餐）と呼ばれる考え方である。この状況下では黙示的期待は、少なくとも最初はむしろ限定的な現象であった。しかしながら、それはフス派がどのように彼らの歴史的状況を認識したのかを我々が理解する助けとなる。概して言えば、最も著名な改革者たち（ドレスデンのニコラウス、ストシーブロのヤコウベク、ヤン・フス）の著作や説教において黙示的期待が果たした役割は二次的であった。彼らは頻繁に反キリストへの灰めかしを行ったが、真に終末的な意味合いにおいてではなかった。反キリストについて述べる時、彼らは反キリストをウィクリフの概念に従って解釈し、ローマ教会に対する彼らの論争の表現として用いていたのである。

コンスタンツ公会議（1415年）でフスに死刑が宣告されると、改革運動は大学と教会を離れ、ボヘミア各地のより多くの人々を巻き込んだ。これがフス戦争（1419 - 36年。フス革命とも）の始まりである。フス戦争は、その後数年間にわたりボヘミアとモラヴィアを巻き込み、政治体制、教会組織、そして社会関係を転覆した。多くの下層民がこの運動に参加すると、フス派内部に文化的社会的多極化が生じた。その多様な構成要素間の危うく複雑な均衡は、1419年、崩壊をきたした。同年初め、ベンツェスラウス4世（ボヘミア王1378 - 1419年、神聖ローマ帝国皇帝1378 - 1400年）はカトリシズムを再建しようとしたが、下層民は彼の努力に強く反対した。南ボヘミアではフス派の聖職者たちが地域の教区から独立した信者の集会を立ち上げた。これらの信徒集会は福音主義的、使徒的な生活様式を再現しようとする、新しい社会組織の萌芽となった。その最も有名な中心はターボルと名付けられたベヒニェ城に近い丘の上にあった。この本拠地に参集した者たちはターボル派と呼ばれた。その間、フス派には別な急進的グループがプラハで誕生し

た。その最も名の知られた代表はヤン・ジェリフスキー、前述の『至高の書』を説教で用いた最初の説教師であった。チェコの首都では、急進派がカトリック、王党派、ボヘミアの貴族、フス派の穏健派からなる混成勢力と対立した。国王に依然忠実な市参事会員たちが市庁舎の窓から投げ落とされるに至り（プラハの「窓外放出」事件。三十年戦争のきっかけとなった）、その均衡は崩れた。その直後、ベンツェスラウス4世が崩御した（1419年8月）。

フス派内の諸派間の激しい軋轢は、急進派とターボル派の黙示思想の進展の中に見ることができる。当時の複数の年代記によれば、最初、最主流派をなしていたのは、近代の歴史家が「宿命的千年王国主義」、もしくはもっと厳密には「キリスト再臨説」と呼ぶ教説であった。神聖ローマ帝国皇帝ジギスムンド（位1410 - 37年）による「ウイクリフ派」すなわちフス派の極端に急進的な一派への攻撃に対する応酬として、ターボル派の聖職者たちは信者らに故郷を離れて彼らの配下の5つの都市へと避難するよう勧告した。1419年11月、大学教師や首都の貴族たちと対立したターボル派は、プラハをバビロンと同一視し、捨て去るべき都市であると考へた。彼らは支持者らに、かつてロトがソドムから逃れたように、腐敗した既成権力から逃れるため山へと移るよう促した（Kaminsky 1967, 310-29 参照）。この帰結として、信者集会の性格に変化が生じた。当初は聖体の祝福と説教のためだけに定期的に参集する仮想的共同体であったが、後には、患難切迫の予期と対立勢力との間の終末をめぐる信条・思想上の軋轢に日々の暮らしや生き方が左右される実際の共同体へと転じたのである。この状況下、信者らは当初掲げていた平和主義を捨て、自己防衛のための暴力の使用を正当化した。

1420年3月、ウイクリフ派はプルゼニ（「太陽の都」）を去り、南ボヘミアに落ち着いた。この地で彼らは物品の共同管理と各人の必要に応じた分配、私有財産の没収に基づいた管理体制を形成した。その間、ターボル派はフラジシュチェの廃城を占拠し、そこで新たなターボルの町の建設を始めた。この要塞都市の建設はウイクリフ派の希望をかき立てた。彼らはこの新たなターボル山へと各地から駆けつけ、そこに避難所を見出した。この状況の中、これらの集団には黙示観の点で重要な変化が生じた。キリストの千年王国は間もなく地上に樹立され、すべての罪人に報復を加えることを多くの者が確信するようになったのである（Kaminsky 1967,

336-60 参照)。これら2つの要素の結合は中世の黙示思想における重大な移行を示す。一方では、千年王国の切迫という考えは幻視者や預言者、写本の読者たちの集団の範囲を超えて完全な充足と歓喜が間もなく実現し、いかなる形態の統治も私的財産もない罪無き地上の楽園が回復することを信じる広範囲な運動の標語となった。他方で、「報復の時」という概念は特にターボル派聖職者ジョン・カペクによって理論化され、暴力による攻撃、そして革命的理念の実現を正当化した。

ターボル派は一種の都市国家のように組織されていた。最初はおそらく聖職者達が物品を配分していた。必要物資は生産、商業活動、そして周辺領域への重税によりまかなわれた (Kaminsky 1967, 384-97)。農民たちは財政的圧迫下にあった。主として初期段階には、ターボル派の聖職者たちは社会・政治的立場から中心的役割を演じた。中でもマルティン・フスカとペルフジモフのニコラス (ニコラス・ビスクペクという名でも知られる) が著名だが、特にフスカは、聖徒たちの王国がまもなく到来し、あらゆる苦しみが消え去ると述べたことでよく知られている。

ターボル派はプラハに戻り (1420年5月)、同派の聖職者らは彼らを非難した大学教師たちに応酬する。だが、運動の一体性は崩れてゆく。参照可能な資料では聖体に関するフスカ派の種々の考え方が強調されている。だが、この危機がどこで何故発生したのかについて完全には明らかにしていない。おそらく聖体に関わる神学論争は、革命をいかに進めるか、また、プラハの穏健なフスカ派とどう関係を維持するかという問題に関する根深い戦略的相違を表していたと思われる。フスカはウトロキストたち (二種陪餐を主張する一派) とターボル派の両方から攻撃され、少数の支持者グループとともに孤立し続けた。1421年1月、「ピカルディ」と呼ばれる異端者の一人であるとの告発により彼は投獄され、拷問を受け、1421年8月に禁刑に処せられた。「ピカルディ」とは、「自由心霊派」を支持した一派で、ターボルにおいて活動していたが、過激な言動のため後に追放された者たちの呼称である。³ 「自由心霊派」とは道徳的放縦や異端的神秘主義をその特徴とする異端者たちに対して14世紀初め頃から用いられるようになった一つの呼称⁴)。ほどなく、何百人ものピカルディがターボル派から追放された。これは同年秋に到来した彼らの全滅の最初の一歩であった。プラハでは、ヤン・ジェリフスキー殺害後 (1422年3月)、穏健派勢力が事態の掌握を回復した。

何十年にもわたりターボル派は独立集団として存続し、強大な軍事力と極端な防衛的構造を備えていた。1452年、ボヘミア当局は形骸化した同派を制圧することに漸く成功した。投獄された僅かなターボル派残党の中には年老いたペルフジモフのニコラスもいた。ニコラスは、フスカから聖職者たちによって1420年、「長老(司教にあたる)」に任ぜられたが、ピカルディの全滅という結果で終わった緊迫と混乱の時代に彼はフスカと袂を分かった。その時以来、彼はターボル派の主要な神学者であり、同派の歴史的記憶の著述を行なった。ニコラスの未刊の『黙示録註解』(1430年頃)は、ターボルの都市建設時に公式の教説とされたキリスト再臨説や千年王国主義的期待とはかなり異なる観点を示している。この著作は『黙示録』の主要章句のチェコ語対訳が添えられたラテン語による説教集である。ターボル派の聖職者たちに語りかける形をとりつつ、ニコラスは中世の聖書注釈の伝統に従っている。ニコラスが言及した同時代の典拠としてはストシーブロのヤコウベクによる『黙示録註解』(1421年、チェコ語で書かれた)があるが、同書を彼はターボル派風に解釈している。また、『至高の書』からも直接引用を行っている。歴史を7つの局面に分ける伝統的な見方を再現しながら、ニコラスは自らが第5の時代を生きていると確信し、第6の時代の初めにこの世に反キリストが到来し、そのすぐ後に審判の日が来る、そして第7の時代には歴史を超越した神の勝利があるだろう、と考えた。ニコラスは千年王国的な考え方をもはや誰も信じない「おとぎ話」であると考えてあからさまに攻撃しつつ、自らは反キリストの到来と審判の日の間の「短いささやかな平和」を予示することを控え、より無難な注釈上の主題に取り組んだ。

ニコラスによれば悪との闘争には2つのレベルがある。一方でそれは魂が自らの負の衝動を克服しようと試みる内面的な闘争に相当する。他方、それは歴史的、社会的闘争でもあり、その中では聖徒らは反キリストの攻撃に対抗することを求められる。反キリストの神秘の姿はローマ教会である。この第2のレベルにおいてはニコラスの考えには幾つかの曖昧な要素がある。一方で彼はターボル派が受けている攻撃と迫害を黙示的な明徴と考えている。そう考えることによって彼はフスカ派の遺産の砦としてのプラハの町の神話を聖別する。その頃、プラハでは多くの者が神聖ローマ帝国との新たな関係とローマ教会との再結合を主張し始めていたが、ニコラスは同時代の歴史的状況に対して落胆を隠さない。初期のターボル派が経験した高

揚は終わった。新しい儀式、特に二種陪餐は、飲酒など人々の間にはびこる旧来の悪徳の格好の隠蔽となっていた。人々は説教や霊的交わりにさほど関心を示さなくなり、初期キリスト教的共同体の生活の再現を可能と信じて依然として教会改革の可能性を語る者らを多くの人々が批判し、嘲笑った。ニコラスはターボル派の意義はコンスタンティヌス大帝以前の教会の再生の試みにあるのであって、千年王国主義的期待にあるのではないと信じていた。現下の状況と未来の出来事についてのニコラスの記述は、分別賢慮ある者たちは運動の失敗に既に気付いていたという当時の状況を反映している。

ドイツにおける黙示的運動 (pp. 314 – 316)

15世紀にはボヘミアとモラヴィアが異端審問と神聖ローマ皇帝の力を免れていたことを考えれば、これらの地域で急進的黙示的運動が大規模かつ強力に展開された理由を説明することができるだろう。異端審問や帝権が統制を及ぼすことのできた地域（ドイツなど）では、急進的黙示的潮流は速やかに抑圧されたのである。とはいえ、ドイツ各地にも、個人や少数集団に限定されはするが、黙示運動の痕跡を幾つか見つけることができる。これらの痕跡がさほど多く見られないのは、教会側が異端と見なした動きを迅速かつ精力的に攻撃したためである。教会側は異端と見なした者の著作を葬り去るのが通常であるため、著者らに関する情報は各種年代記や歴史書、また、彼らの敵や外部の観察者によって作成された裁判記録から得られるのみであり、その収集には困難が伴う。このため、これら異端とされた者たちが以前の黙示運動との結び付きや関係性を実際に意識していたのか、もしくはせめて何らかの関係性が彼ら自身の著作によって裏付けられるかどうかを判断することは難しい。そうした関係性は、神学者や異端審問官が自身の神学的バックグラウンドや異端の学説に関する知識に基づいて作り出したものかもしれない。

ドイツでの主要な黙示的傾向はフランシスコ会の黙示思想に由来する主題を反映していることが多い（例えばオーリーヴィ、ルペシッサのヨハネス、コゼンツァのテレスフォラス）。初期の重要人物たちの中でも主要なのはブラウンシュバイクのフレデリックである。彼は、1389年から1392年にわたって南ザクセンとラインラントに広まった千年王国主義を文字通りの形で唱道したフランシスコ会士である。

1389年、彼の仲間のフランシスコ会士、アルテヴェルデのディートリッヒによって書かれた論文が、「ユダヤ人たちのおとぎ話」と「ルベシッサのヨハネスの狂気」に倣ったかどでフレデリックを告発した。1392年、次のような主張をしたかどで彼は終身刑を宣告された。すなわち、反キリストが4年半以内に到来すること、ユダヤ人の一時的な力の回復が間近であること、エルサレムが再建されること、「低き者」つまり小さき兄弟会托鉢修道士にして「回復する者 (reparator)」であり、反キリストを殺す者が到来すること、そして最後には地上における千年王国が始まり、その王国は「回復する者」(教皇であると同時に皇帝でもある)によって聖霊の掟のもと統治され、キリストの最後の来臨と全ての者の復活の時まで続くであろうこと、などである。フレデリックは自分がバプテスマのヨハネの役割を演じると信じ、自ら「回復する者」の先駆けとなり、「回復する者」の到来を聖俗両方に告げ知らせると考えていた。また、彼は、同時代の聖職者らは真に「油注がれた者」ではなく、「回復する者」の時代にのみ世界は真の聖職者を得るであろうと考えていた。

コンスタンツ公会議がフスの処刑を決定したように、バーゼル公会議(1431-39年)も一人の異端者の処刑を決定した。1446年のブルデスドルフのニコラウスの火刑である。だが、フスの時とは異なり、この処刑に抗議する者はいなかった。宣告によれば、ニコラウスは平信徒で、神学や聖書釈義の書物の著者であったが、著作のなかには父(なる神)や詩篇、『黙示録』に関する注釈のほか、『預言者達による聖霊の証』と題する本があった。裁判に際してニコラウスは彼の著作がドイツ、フランス、スペインでよく知られていると主張したが、写本は1部も残存しない。おそらく公会議で焚書の決定がなされたためだろう。自らを神の使者と見なしていたニコラウスはバーゼルへ急ぎ赴いたが、直ちに逮捕され、彼の説を審査するため1443年に設立された委員会によって遂に異端と断じられた。

異端とされたニコラウスの論文は彼に対する死刑宣告文中で再現されており、彼の教えの詳細な説明を提供してくれる。ニコラウスは世界の第7の時代と聖霊の第3の福音が間近に迫っていると宣言した。彼の考えによれば、最後の時代は教皇と皇帝の力を結合した天使的教皇 (*pastor angelicus*) の到来を特徴とする。ニコラウスは天使的教皇とその支持者たちは全能であると考えた。また、天使的教皇は

「ダビデのかぎ」（『黙示録』3:7 参照）を持ち、人間であるが永遠に生きるであろう、としている。また、ニコラウスの異端宣告された別の論文は、オリヴィの『黙示録講義』をほぼ原文通り引用している。調査委員会に参加した枢機卿セゴビアのヨハネスは、ニコラウスがコゼンツァのテレスフォルスの学説に影響を受けていたことを認めている。ニコラウスの説のその他の要素として、ユダヤ人が未来において果たす役割の強調が見られるが、これはおそらくルベシッサのヨハネスもしくはテレスフォルスに由来している。ニコラウスの立場は非常に急進的で、ユダヤ教の黙示思想の直接的影響が認められる。例えば、上でも見た天使的教皇はユダヤ人が待望するメシアと同じく、ユダヤ人たちを囚われの身の上から解放し、世界を支配させるであろう、また、教会の「枝付き燭台」（『黙示録』4:5）はシナゴグに戻されるであろう、救われるためにユダヤ人はキリスト教に改宗する必要はなく、ただモーセの律法と彼らの父祖の伝統に忠実でありさえすればよい、と彼は考えている。

1465年から66年の間、エイガにおいて新しい集団が生まれた。「ヴィルスベルク兄弟団」である。⁵唯一名前の伝わっている団員はヤンコとリビンである。近年、教団員の手になる2つの文書がアウグスブルク大学図書館で発見された。彼らの教説に直接触れることを可能にした発見であり、以前にはエゲルの古文書とアウグスティヌス会士で神学者のドルステン⁶のヨハネスによるスコラ学的著作からの間接的典拠を通してのみ知られていたものである。これらの文書から、最後の審判に先立って地上に第3の時代が訪れ、メシア的人物の到来がその徴となることを彼らが信じていたという仮説を立てることができる。彼らはこの人物を「救い主によって油注がれた者」、聖霊の時代の新たなキリストのような者として描き、その者は聖処女から霊的な方法で生まれ、啓示の神秘を明らかにし、最後の時代における144,000人の選ばれし者を救済へと導く（『黙示録』7:1-8 参照）、そして、バプテスマのヨハネが彼の先駆けとなるであろう、と考えた。ヴィルスベルク教団の主張には、ブラウンシュバイクのフレデリックとブルデスドルフのニコラウスの説教の中にも表れていた主題と視点を見出すことができる。また、ヤンコはエゲルの会則派フランシスコ会修道院を頻繁に訪れていたようであり、フランシスコ会に発する急進的黙示的運動の理論もよく知悉していたに違いない。リビンは1468年、終身刑

に処せられたが、ほどなく死亡した。ヤンコは逃亡し、1466年以降の消息は明らかではない。

ヴィルスブルク兄弟団の事件は明確に政治的な意味合いを含んでおり、エイガの地政学的観点から解釈することができる。エイガはボヘミア王国と古くより結びつきを持つドイツの都市で、フス派の領域内におけるいわばカトリックの飛び地である。ヴィルスブルク兄弟団員が異端とされ、何故ヤンコが「フス派」として告発されたのかは明白である。また、彼らが貴族階級に属していたことから、彼らの教説自体に明らかな政治的な意味合いがあった。その頃、給料の未払いを理由に軍隊の反乱が起きていた。この状況下でヴィルスブルク兄弟団は、軍は君主と聖職者らを殺害するために間もなく蜂起するであろう、と預言したようである。彼らは、ほどなく到来する第3の時代には社会的階級、特に高位の貴族階級は取り除かれるであろうと信じていた。

結論として、社会的、政治的革命を伴う宣言や計画が作られたり、議論されたりしたものの、ドイツでは黙示思想に関連した暴動はかなり限定的であったといえる。こうした動きは教会や社会に対する不満の存在を証明するものではあったが、その不満が表面化するのにはプロテスタントによる宗教改革のさなか、1510年代のことである。

イタリアにおける黙示的緊張 (1480年頃—1520年頃) (pp. 316—318)

15世紀イタリアでは、説教師たちはしばしば黙示的テーマを用い、反キリストの到来が間近であると説いた。ドミニコ会士のビセンテ・フェレール(1419年没。聖人)とヴェルチェッリのマンフレッド(1431年没)、フランシスコ会士のシエナのベルナルディーノ(1444年没。聖人)らが最も高名な説教師であった。彼らは終末が間近であると聴衆に警告しながら、道徳的改革、悔い改め、回心を説いた。ほどなくして、新たな時代への待望が人文主義者の間に広まった。15世紀末になると、災厄の切迫を述べる言説は刷新と教会改革への希望と結びつけられた。反キリスト到来の切迫を憂慮すると同時に天使的教皇の到来を信じる巡回説教師や学識ある高位聖職者について記述した書物も見られる。

唯一フィレンツェでは終末の予期が社会的、政治的にこの都市の重要な一面とな

った。それは主としてドミニコ会士説教師ジローラモ・サヴォナローラによる。サヴォナローラはピエロ・デ・メディチ（1503年没。ロレンツォ・デ・メディチの子）のフィレンツェ追放とフランス王シャルル8世による進攻（1494年）の時期に極めて重要な役割を演じた。かつては反駁、擁護のいずれかであったサヴォナローラに関する議論は（Weinstein 1991 参照）、近年漸く、彼の教説の発展過程を考察する方向へと移ってきている。彼の教説の様々な段階は、フィレンツェの市民生活と彼の「党派」すなわち「ピアニョーニ（Piagnoni 泣き虫党）」、別称「フラテスキ（Frateschi 修道士党）」の命運に照らして考察されねばならない。サヴォナローラの劇的な死を彼の人生の象徴と解釈し、彼を預言の殉教者として称揚する研究者も多いが、彼の教説がいかに推移したかを考察することで、魅力と曖昧さを備えた彼の実態的な姿が見えてくるだろう。

若きサヴォナローラは、フィレンツェでの最初の滞在期間中（1482 - 87年）、強固なトマス神学的バックグラウンドを示したが、それを彼は終生忠実に守った。1490年、フィレンツェに戻ると彼は『黙示録講義』を著し、悔い改めと自己否定を強く勧めながら切迫する終末に絶えず言及している。1494年まで彼の説教は、フィレンツェの政治生命や歴史的命運に直結した主題を扱わなかったし、メディチ家に敵対もしなかった。没落したメディチ家がフィレンツェから逃亡すると、ピアニョーニは新たな政治的、社会的状況の中、自派を強く押し出した。シャルル8世のイタリア侵攻の脅威が迫る中、状況は錯綜を極めていた。この困難な局面においてサヴォナローラは、突如、以前は彼の説教に特に関心を示さなかった社会グループにとって極めて重要な人物となった。彼はフィレンツェとシャルル8世の間に平和を成立させた功労者であると見なされ、フィレンツェの市機構内で一層強力な役割を得たのである。この時点でサヴォナローラは説教のトーンを激変させ、この都市の良心を一体として表現するメッセージを発するようになった。黙示的レトリックのおなじみの比喻を用いながらサヴォナローラは、フィレンツェが神によって「新しいエルサレム」に選ばれ、一新されたキリスト教的至純の模範となるであろうと預言した。彼は、教皇アレクサンデル6世を反キリストと同一視し、ローマという「バビロン」が間もなく打ち倒されることを予示した。サヴォナローラがますます鋭く教皇を攻撃すると、ついにアレクサンデル6世は反撃した。教皇は、サヴ

ォナローラと距離を置かなければ聖務停止令を発すると述べてフィレンツェを脅した。ピアニョーニと対立する党派とフランシスコ会の説教師たちはサヴォナローラをフィレンツェの代表と認めておらず、教皇の立場を支持した。サヴォナローラの失脚は早かった。1498年春、彼は逮捕され、審問と拷問を受け、ついには火刑に処された。

フィレンツェの市民生活が興奮の最高潮にあった時期でさえ、サヴォナローラの黙示的展望は、フィレンツェ社会にキリスト教の教えを浸透させ、道徳的にするという彼のより大きな計画の一面に過ぎなかった。その計画を達成するため、サヴォナローラは、巨大な政治・経済力を得るよう運命づけられた選ばれし都市の神話を喚起する言葉やイメージを駆使して、フィレンツェ内に一層大きな合意を形成しようと努めた。とはいえ、黙示的特質は彼の説教の主要な面の一つをなしていた。最終期の彼の説教の特徴は、バビロンたるローマ教会の罪を糾弾し、聖なる教皇の到来によりまもなく教会改革がなされると宣言する点である。そして、このことが教皇アレクサンデル6世に断固たる処断をとらせた理由であった。

サヴォナローラの教説体系が多義的であったように、彼の支持者たちも社会的、イデオロギー的に多種多様であった。彼は徐々に民衆を巻き込むことを目指していたが、サヴォナローラのメッセージは上流階級に加え、主として知識人、中流階級の人々、職人達の間で受け入れられた。サヴォナローラの死後何十年にもわたってピアニョーニはフィレンツェの社会生活上重要な存在であり続けた。道徳的、宗教的改革へのサヴォナローラの呼びかけに関して言えば、内的生活において改革を実現しようと試みる者、教会機構内での宗教生活を改革しようと試みる者、また、彼のメッセージの急進的で革命的な側面を強調する者もあり、取り組み方は様々であったが、彼の改革は様々な形で存続したのである (Polizzotto 1994 参照)。

急進的サヴォナローラ主義グループの中では、職人のピエトロ・ベルナルディーノが最も重要である。サヴォナローラの存命中からベルナルディーノはかなり成功を収めていた。最初は少年たちの友愛会の平信徒説教者として、続いて小さな活動団体の指導者として彼は活躍した。1497年、ベルナルディーノは神から特別なお召しを受けたと信じ、フィレンツェの若者たちの教育が自らの使命であると確信した。フィレンツェの子供たちは彼ら自身の純真さと恩寵についての直感的知識の導

きにより、未来の改革計画のための大きな可能性を有している、とベルナルディーノは考えていた。多くの学者はベルナルディーノの教説を神秘的と考えている。だが、彼のメッセージやサヴォナローラの死後地下に潜伏することとなった彼の少数の信者集会の構成自体には、黙示的な集団との共通点もあった。ベルナルディーノは聖職者たちが聖書とキリストの模範に反していると主張し、神は自らの計画を貧しい者、弱き者、迫害されている者だけに啓示し給うた、と言明した。また、彼は支持者らに塗油し、彼らは聖霊により「油注がれた者」であると主張した。フィレンツェからの逃亡を余儀なくされると、彼は逃亡を「油注がれた者たち」が邪悪な者らから遠ざかるために神から与えられた贈物であると解釈した (Polizzotto 1994, 134)。最後にはベルナルディーノと支持者の幾人かは投獄され、拷問を受けた。そして1502年、遂に火刑に処せられた。

急進的サヴォナローラ主義の最後の主要な代表者はテオドールという名前の自称カマルドリ会士 (カマルドリ会は、中部イタリアのアレッツォ近くのカマルドリに1012年頃創設されたベネディクト会系の修道会) であった。彼は1515年、フィレンツェで逮捕された。教会裁判所にて彼は、サヴォナローラが彼の前に現れ、教会の一新が間近であることを告げた、と主張した。教会改革は、世俗の君主たちが一斉に聖職者、修道士、教皇、そして天使的教皇を認めないキリスト教徒全員を攻撃した結果なされるであろう、また、天使的教皇はあらゆる働きものが取り除かれた教会を支持するであろう、とテオドールは主張した。また、テオドールは自身が大天使ミカエルによって養われていると主張し、彼は自らを天使的教皇とみなしていた。彼は異端とされ、10年間の投獄に処せられたが、1519年に脱獄し、以前のような説教を再開した。だが、遂には再逮捕され、終身刑に処せられた (Polizzotto 1994)。

終りに

以上が、ヨーロッパ中世後期の急進的黙示的運動についてのポテスタの考究の概要である。急進的黙示的運動は現代的意味での革命的イデオロギーとして始まったのでは必ずしもなかったが、多くの運動が中世社会における貧しい人々や通常は物言わぬ人々の声を表していた。急進的黙示的運動は周縁化され、しばしば異端とさ

れたが、そうした立場を熱心に支持した人々は、これら運動のキリスト教的黙示思想の言説の中に彼らの希望を表現する方法を見出したのである。

¹ “*Vademecum in tribulatione*,” in *Appendix ad Fasciculum Rerum Expetendarum et Fugiendarum*, ed. Edward Brown [London: Chiswell, 1690], 496-508, esp. 499.

² *Ibid.*, 500-501, 506.

³ ピカルディについては、ノーマン・コーン、『千年王国の追求』（増補改訂版 1970。江河徹訳 紀伊國屋書店 1978）、p. 227 参照。

⁴ 自由心霊派の全容はいまだ解明されておらず、確固たる定義がなされているわけではないが、概ねこのように解されている。村上寛、「自由心霊派とマルグリット・ポレート」早稲田大学ヨーロッパ中世研究所編『エクフランス：ヨーロッパ文化研究』第1号（2011）、p. 96 参照。

⁵ ヴィルスベルクはドイツ、バイエルン州の都市。ヴィルスベルク兄弟団についてはノーマン・コーン、『千年王国の追求』、pp. 231-33 参照。